

屈曲せずにそのまま伸びる口縁部を持つ鍋がSK39から出土している。これ以外では、すべての遺構で口縁端部が上方に屈曲する形態の長甕・小甕が主流となっている。

土師器が食膳具の主体を占め、土師器無台碗の作りが粗雑になるという様相は、春日真実氏による編年〔春日1999・2005〕（以下、春日編年という）のⅦ期に相当する。

次に、これまでに調査された同じ沖ノ羽遺跡の土器群の年代観を、本遺跡と比較する。沖ノ羽遺跡は数回にわたって調査されてきたが、中でも新潟県が調査した沖ノ羽遺跡（C地区）〔春日2003a〕（以下、県沖ノ羽遺跡という）と、旧新津市が調査を行った沖ノ羽遺跡〔立木・澤野ほか2005〕（以下、市沖ノ羽遺跡という）が本遺跡1区と調査区が隣接している。これらの年代観を見ると、県沖ノ羽遺跡ではⅤ1期からⅥ2期までの資料が確認されており、市沖ノ羽遺跡でもすべての遺構がⅥ期に収まるとされ、本遺跡1区に先行する年代となっている。このほか、新潟市秋葉区（以下、秋葉区という）の中でⅦ期の土器がまとまって出土した遺跡は今までに確認されていない。

秋葉区周辺の遺跡では、新潟市江南区小丸山遺跡SK1〔小池・本間1995〕、同大淵遺跡SK36〔廣野・朝岡1999〕、南蒲原郡田上町道下遺跡SK13〔田畑1994〕などが当該期の遺跡として挙げられる。小丸山遺跡SK1と道下遺跡SK13は春日編年Ⅶ1期、大淵遺跡SK36は春日編年Ⅶ2期にそれぞれ比定されている。これらと比較すると、口径12～13cmの土師器無台碗を主体とする本遺跡の1区主要遺構の様相は、小丸山遺跡SK1、道下遺跡SK13と同様である。また、1区でも前段階から続く内湾して立ち上がる形態の土師器無台碗と、底部が厚く体部の開きが大きい無台碗が共存している様相が確認できる。

一方、大淵遺跡SK36は土師器無台碗の小形化が進み、また、口縁端部が外反する形態のものが主体となっていることから、本遺跡1区の主要遺構出土土器より一段階新しい様相を示していると思われる。本遺跡では1区包含層出土の土師器無台碗がこれに近い。

これらのことから、1区主要遺構出土の土器は、春日編年Ⅶ1期に比定され、実年代としては10世紀前葉に位置付けられると考える。

3区と5区では、遺構出土土器が少なかったため、比率による検討はできなかった。個別の土器の形態を見ると、土師器無台碗は内湾して立ち上がる形態が主体となっており、また、粗雑な作りとなるようなものが見られないことから、1区より古い様相を呈しているといえよう。ただし、須恵器の出土が少ないことから、春日編年Ⅵ期でも新しい段階のⅥ2・3期、実年代で9世紀末から10世紀初頭に比定することができるだろう。

これらのことから、本遺跡の存続時期を全ての区と一部包含層資料も含めて考察すると、主体となる時期が10世紀前葉（Ⅶ1期）で、9世紀末から10世紀初頭（Ⅵ2・3期）にはすでに遺跡が形成され、一部が10世紀中葉（Ⅶ2期）まで継続するという変遷を追うことができる。

## 第4節 沖ノ羽遺跡出土の土師器平底長甕について

沖ノ羽遺跡から平安時代の土師器平底長甕が2点出土した。1点（図版64－232）は1区包含層（17AC4他）から出土している。その特徴は、底部内面に当て具を当て、外面はタタキにより若干の底面を残して丸底化した後に、底部を平面的に削り出して5cm前後の小さな底部を作出している（第22図写真参照）。底部の器厚は0.4cm程度で、底部近くの体部が0.6～0.8cmあるのに比べて薄い。1点（図版69－336）は5区包含層（07AV22・07AW23）の出土品である。特徴は内面を底部から当て具を当て、外面はタタキにより丸底化した後に底部を削り出しており、ケズリの痕跡が残る。その後、指頭のようなもので底部側から強くしめられている（第22図写真参照）。底径7cm程度で、底部器厚は0.4cm程度である。底径が前者よりも大きいことから底面を削る以前のタタキ段階で平底化するように、丸底というより半丸底状にしていた可能性もある。2点とも包含層出土品であるが、前述された遺構一括資料の分析から、概ね1・5区ともに春日編年Ⅵ2・3期～Ⅶ1期〔春日

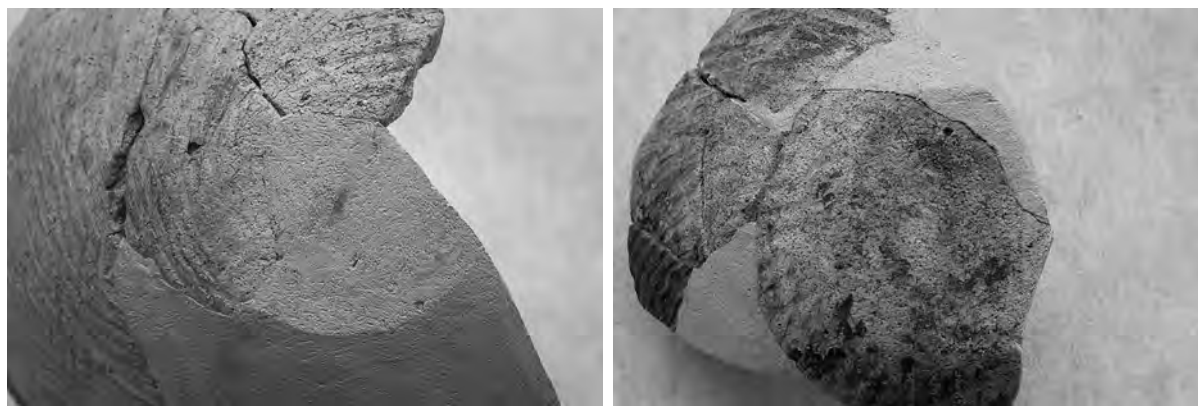
1999・2005)、実年代で9世紀後半から10世紀前葉に限定される。5区では一部、古墳と室町時代に所属する時期の遺物が出土しているが、平安時代の春日編年Ⅵ期以前の資料は出土しておらず、この2点の包含層資料も概ね前述の年代観の範囲に含まれると考える。その前提に立ち、この2点の資料の位置付けを考える。

新潟県の佐渡を除く越後地方における古代煮炊具の研究史は、近年の春日真実氏の研究に詳しい〔春日2007〕。その中で重要なものを取り上げると、1980年代後半の坂井秀弥氏による古代煮沸具を対象とした一連の研究が挙げられる。それによると、聖籠町山三賀Ⅱ遺跡の分析を通じて、阿賀野川以北の土師器煮沸具の変遷を明らかにしており〔坂井1989a〕、さらに、北陸地方に分布が特有な「北陸型土師器長甕」の製作技法を明示した〔坂井1989b〕。また、丸底になる「北陸型土師器長甕」と、平底になる「陸奥型土師器長甕」の底部に着目し、須恵器大甕の底部が北陸では丸底、関東から陸奥国では平底に作られており、それぞれに製作技法が土師器長甕の製作技法に取り入れられたことを推定している〔坂井1990b〕。坂井氏が示した阿賀野川以北の山三賀Ⅱ遺跡の長甕の変遷の中で、A系を非ロクロ使用の平底、B系をロクロ使用の丸底、C系をロクロ使用の平底に3分類した（以下、山三賀A系等とする）。A系は山三賀Ⅰ期（8世紀第1四半紀）に主体的で、Ⅱ期（8世紀第2・3四半紀）以降、急速に衰退する。B系はⅠ期から少量存在し、Ⅱ2期よりやや増え、Ⅲ期（8世紀第1～9世紀第1四半期）以降はほとんどすべてがこれになる。C系はⅡ1期にもっとも多く、その時期の主体をなし、この前後にも存在するがⅢ期以降は見られないとし、C系は阿賀野川以北にだけ分布する可能性を指摘している〔坂井1990a〕。この傾向は、近年行われた前述の春日氏の論考でも大略変更はない。春日氏は長甕（長釜）の分類を体部の調整技法により大別4分類し、A類をハケメ成形、B類を須恵器技法、C類を外削り、D類を外削ミガキに分類した（以下、春日A類等とする）。さらに底部や口縁の形態等で細分、細細分されている。それによると、山三賀A系は春日A2a類、山三賀B系は春日B1a類、山三賀C系は春日B2類に含まれ細分されている。この両氏の分類に今回の沖ノ羽遺跡出土資料を当てはめると、山三賀分類には当てはまるものが見当たらず、春日分類の春日B2類となるが、細細分では分類に当てはまるものがない。

新潟県以外に目を向けると、福島県会津地方（平安時代は陸奥国会津郡）に似た形態の土師器長甕（第23図）が多数確認されている〔山中1998・2003〕。平安時代の会津地方の大部分は陸奥国会津郡に所属し、越後国とは隣接する関係にある。会津地方の土師器長甕の類例を集成し、考察した山中雄志氏によると、8～9世紀代の土師器長甕を形態と成形技法で4分類し、A類は平底のもの<sup>1)</sup>、B類は丸底のもの、C類を丸底に近い小径底面のもの<sup>2)</sup>、D類を平底ながら叩き痕が密に施されるものとし、さらにA～C類は底部平坦部の調整と体部の再調整技法により細分されている。A類は陸奥国系の系譜を引くもので、B類は陸奥国系の系譜を引く底部成形技法を用いるが、形態は北陸・日本海側の長胴甕に共通する器形を持ち、その影響を受けた土器、C類は形状面で北陸・日本海側の影響を受けた派生型、D類は陸奥国系技法をベースにした会津地方独自の型とした。沖ノ羽遺跡の事例は山中氏の分類に当てはめると232がC類、336がCあるいはD類に近似する。C類は会津地方の土器の位置付けでは9世紀前葉に出現し、10世紀前半まで残る。D類は9世紀末～10世紀前半頃までの時期幅を示されており、厳密な対比は困難であるが、概ね前述した沖ノ羽遺跡出土土器の年代観と合致する。

また、近年同じ秋葉区の諏訪畑遺跡〔潮田2008〕で、類似した資料が確認された（第23図）。口径21.6cm、高さ34cm、底径5cm前後の土師器平底長甕である。体部下半外面はタタキ痕が残り、内面はハケおよびタタキ押さえ痕が残る。底部はタタキ後に底部の一部を削り出し、その後、指頭等による底部押さえがされている。山中氏のC類にあたる。以上見てきたように、県内には現状では土師器平底長甕は、この2遺跡にのみ確認されている。

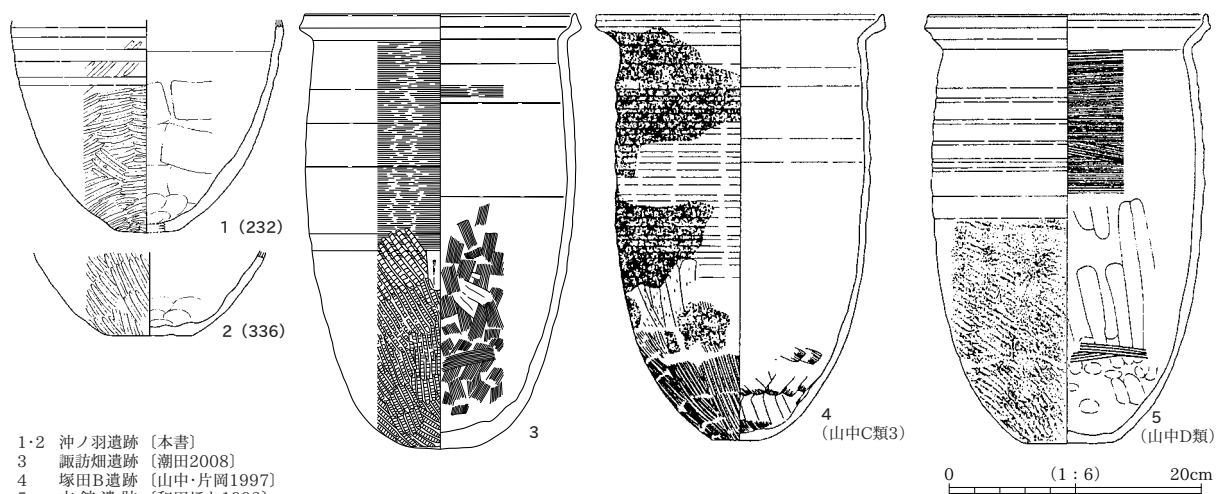
平安時代の会津地方と越後地方との関係を表すものとして、会津盆地南端の会津若松市大戸町他に所在する「大戸窯」の製品が越後側に流入していることが挙げられる。大戸窯は平安時代の8～10世紀にかけて連続的に操業され、一部、瓷器系の中世窯を含めて220基程が確認されている〔石田1993・1994〕。大戸窯製品の特徴は生地粒子密度が高く、全体的にセメント状の胎土を特徴〔石田1993〕とし、新潟県内の諸須恵器窯（阿賀



1 (232)

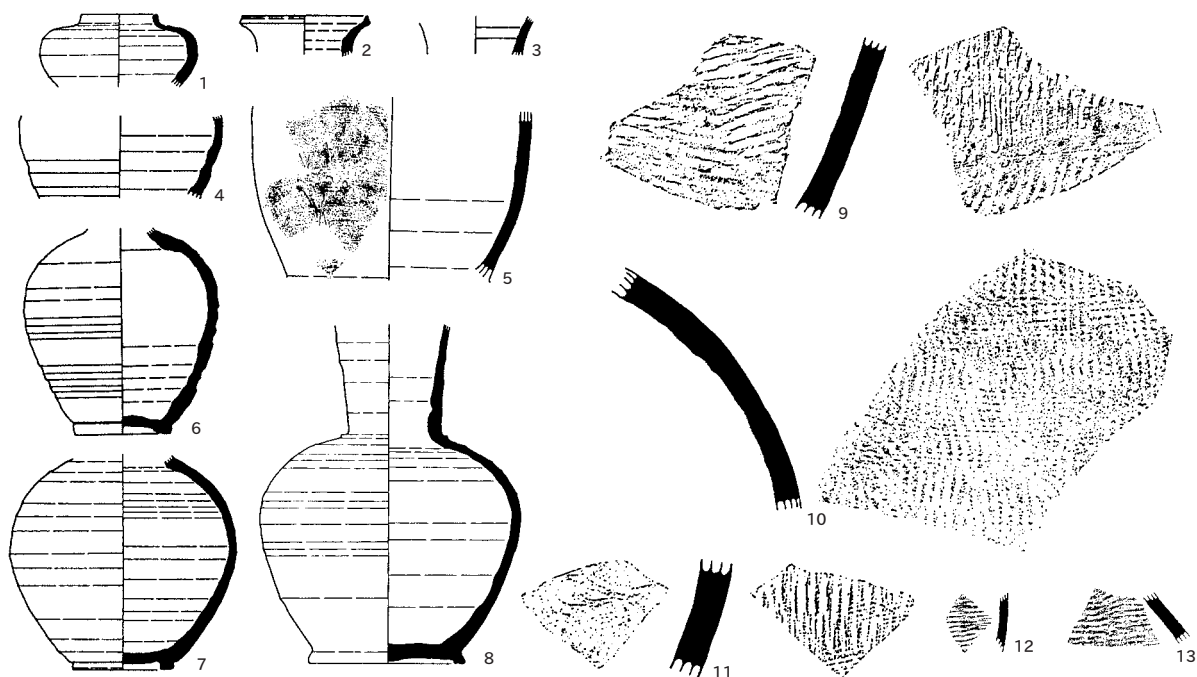
2 (336)

第22図 沖ノ羽遺跡出土の土師器平底長甕底部写真



- 1・2 沖ノ羽遺跡 [本書]  
3 諏訪畑遺跡 [潮田2008]  
4 塚田B遺跡 [山中・片岡1997]  
5 古舘遺跡 [和田ほか1992]

第23図 土師器平底長甕の出土例



- 1・12・13 北野遺跡（上層） [高橋ほか2005]  
2・3・4・6・9～11 大坂上道遺跡 [滝沢・北村ほか1995]  
5 上野東遺跡 [高橋ほか2006]  
7 高瀬遺跡 [國島2006]  
8 牛道遺跡 [土橋ほか1999]

第24図 新潟県内出土の大戸窯産須恵器



北、小泊窯、新津丘陵窯、西古志窯、高田平野東・西丘陵窯）とは異なる特徴的な胎土である。新潟県内で平安時代の大戸窯製品は東蒲原郡阿賀町大坂上道遺跡〔滝沢・北村ほか 1995、滝沢 2006〕で最初に確認され、それ以降に、同北野遺跡（上層）〔高橋ほか 2005〕、同上野東遺跡〔高橋ほか 2006〕、同高瀬遺跡〔國島 2006〕、新潟市江南区牛道遺跡〔土橋ほか 1999〕などで確認されている（第 24 図）。大坂上道遺跡では、9 世紀後半の春日編年Ⅵ 2 ～ 3 期前後の時期の小泊産須恵器杯とともに、大口窯産の須恵器長頸壺・大甕などが出土している。須恵器長頸壺は 9 世紀中葉～末葉の南原 19 号窯式、ないしは上雨屋 107 号窯式〔石田 1993〕に比定されている〔滝沢 2006〕。北野遺跡（上層）では、大口窯産の須恵器短頸壺 1 点と大甕破片 2 点を確認されている。上野東遺跡では須恵器長頸壺体部片 1 点が大戸窯に比定されている。高瀬遺跡では大口窯産の須恵器長頸壺が 1 点採集されている。牛道遺跡では土坑中（SK217）から大口窯産の頸部に凸帯を持つ須恵器長頸壺が出土し、上雨屋 107 号窯式に比定されている〔土橋ほか 1999〕。

遺物の面からは大口窯産須恵器は長頸・短頸壺と大甕が確認され、貯蔵具に限定されている。大坂上道遺跡の例を見ると伴出した須恵器食膳具の杯は小泊産であり、大口窯産の食膳具の搬入例は今の所ない。時期的には定量確認された大坂上道遺跡の例などは、須恵器杯の特徴などから春日編年Ⅵ 2 ～ 3 期前後、北野遺跡（上層）の例などは黒色土器有台碗などが定量あり春日編年Ⅶ期まで下る可能性があり、実年代で 9 世紀後半～10 世紀前葉位に搬入されている。

分布の面では、阿賀野川流域の会津と越後の接点となる東蒲原郡に多数確認されている。東蒲原郡域は平安時代に越後国蒲原郡に所属するとされる。平安時代の後期には「小川庄」となる。平安時代後期の承安 2 年（1171）には越後国守・城資永が小川荘を会津・恵日寺に寄進することになる〔阿部 1976〕。これ以降、明治 19 年（1886）まで東蒲原郡は会津領となる。このような歴史的背景もあり、会津地方と東蒲原郡域は古代から物流の面からも密接な関係にあることは想像に難くない。また、唯一、新潟平野側で確認されている牛道遺跡は大口窯産須恵器が出土している。現阿賀野川から 2km 弱の位置にあり、内水面を利用した物流の流れでもたらされた可能性が高い。しかし、残念ながら東蒲原郡の遺跡からは土師器平底長甕は確認されていない<sup>3)</sup>。現状では遺物量の少ない遺跡が多く、土師器平底長甕の判別は難しい現状もあるが、大口窯の製品の流入状況から東蒲原郡域には将来の出土が予想される。

これらのことから、新潟平野側から出土した、沖ノ羽遺跡と諏訪畑遺跡の土師器平底長甕は、他人の空似的な土器ではなく、会津地方の影響を受けた土器である可能性が指摘できる。また、大口窯の製品が新潟側に流入する年代とも整合性があり、時期的には 9 世紀後半からの流入とみることができる。古代の流通の中で佐渡国の小泊窯製品が越後国をはじめ国を超えて、広く流通することが知られている〔坂井 1988a〕。会津地方の陸奥国と越後国との物流は、おそらく阿賀野川を介したものであった可能性もある。さらに踏み込めば、阿賀野川と信濃川との河口付近に「蒲原津」が存在し、海運の湊として機能していたことから、会津地方との物流の流れが、阿賀野川を通して内水面を用いた交通路が確立されていたのではと考える。国を超えての物流については意見を持ち合わないが、今回は少ない事例ではあるものの、それ以外の文物も平安時代に会津地方から流入していると思われ、今後注意を要する。

## 第 5 節 沖ノ羽遺跡の性格（附図）

沖ノ羽遺跡の今回の調査地点（1～5 区）は、沖ノ羽遺跡の 10,600,000 m<sup>2</sup>におよぶ遺跡推定範囲の南端に位置する（附図参照）。遺跡の調査は、平成 3・4 年度（1991・1992）に行われた磐越自動車道建設に伴う本発掘調査を皮切りに、平成 15 年以降は毎年継続的に圃場整備事業に伴う発掘調査が行われている（第 1 章第 1 表参照）。平成 17・18 年度（2005・2006）調査は附図に平面図のみ掲載したが、未報告のため詳細は不明である<sup>4)</sup>。したがって、今回は磐越自動車道から南側の調査成果について総括し、まとめとしたい。